

1. ①は別名「ユウレイタケ」とも呼ばれる。

- ・晩春の野山を歩いていると、湿った林床に、全身が白い、首を垂れたような花をつける不思議な植物に出会うことがある。その姿が、幽霊が両手を垂らしている姿を連想させることから「ユウレイタケ」とも呼ばれる。薄暗い林床にぼおっと浮かびあがるように立つ姿を幽霊に見立てたものである。
- ・ギンリョウソウは緑色の葉も茎も持たず、うろこのような白い葉をつけて、茎の先に比較的大きな花を一つつける。下向きにつく花の首に、鱗片状の葉を龍のウロコに見立てて「銀龍草」の名が付けられている。雌蕊がやや青みを帯びる特徴がある。
- ・ギンリョウソウが全身白色をしているのは、葉緑素を持たないからである。我々が通常見かける植物の緑色は、葉緑体に含まれる葉緑素の色であり、葉緑体の部分で太陽のエネルギーを使って水と二酸化炭素からでんぷんなどの養分を作り出す。(光合成)
- ・ギンリョウソウは種子植物であるが、葉緑体をもたず光合成をしないで、落ち葉などが腐ってできた腐葉土から養分を得て生長し、花をつけているのである。

2. 菌類の共生

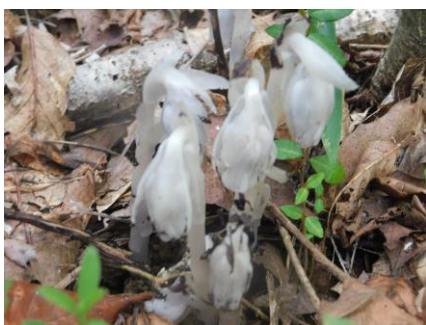
- ・ギンリョウソウは普通の植物にあるような根は見られない。細かいおがくずのような固まりが根である。ギンリョウソウの根には落葉分解性の担子菌や子のう菌と推定される菌類が共生しており、腐葉土の栄養を菌類を通して吸収している。このような植物を「腐生植物」と呼ぶ。
- ・花が終わり、実の時期になると、それまで垂らしていた首をまっすぐにもたげる。直立した果実からは大量の細かな種子が散布される。ギンリョウソウを人工的に栽培するのは難しく、成功例をきかない。幽霊のように思わぬところで出会う植物、それがギンリョウソウであるが、結構出会う機会は多い。



3. ②アキノギンリョウソウ (ギンリョウソウモドキ)

① 20180521 キトラの山頂付近で

- ・②は①よりもずっと少なく、三谷のサークルで、A表の希少種にカウントしてきたが、今年初めて、管理フィールド外で出会うことができた。梅原先生によれば、痩せた土地が肥えてきたからだろうとのこと。
- ・②の花期は9～10月だが、外観はほとんどギンリョウソウと同じ。果実は蒴果。果実が成熟したときに部屋ごとに縦に割れ目ができる。そして基部の方からさけて種子を散布するが、茶褐色の軸が春まで残るようだ。(写真参照)
- ・②も①と同様の腐生植物で、白っぽいのは同じ。光合成をしない。菌類と共生する。
- ・いずれもツツジ科に分類される。
- ・②の柱頭は黄褐色
- ・②は①にくらべれば、つやがなく、より地味な感じがする。



② 20190921 三谷のコウジ山にて



② 果実 (ネットからの引用)